

令和 2 年 6 月 29 日現在

機関番号：37103

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04440

研究課題名(和文) 楽観主義が符号化処理に与える影響 虚偽記憶と自己選択効果による検討

研究課題名(英文) Influence of dispositional optimism on encoding processing: investigation with false memories and self-choice effect

研究代表者

鍋田 智広 (NABETA, Tomohiro)

九州女子大学・人間科学部・准教授

研究者番号：70582948

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：特性的楽観主義とは自分に良い結果が起きると期待する傾向である。特性的楽観主義では、学習項目の詳細な情報を符号化する特異性処理が促進されることが示唆されている。そこで以下の課題を検討した：(1)文章による示差性の付与が符号化処理に与える影響、(2)報酬への動機づけが自己選択効果における誤答に及ぼす影響、(3)特性的楽観主義に与える将来の目標の記述の効果。その結果、示差性の付与は予測通り、特性的楽観主義が高い個人ほど虚偽記憶を抑制する傾向があった。報酬と自己選択変数は特異性処理を促進しなかった。特性的楽観主義は将来の目標を記述することで促進されることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学習材料の示差性の付与が特性的楽観主義において、学習内容の詳細を符号化する認知処理を促進することを示した。このことは、特性的楽観主義が常識的に考えられるように非現実的な成功を夢想する傾向とは異なっている。また、本研究は特性的楽観主義を促進する実験操作は、必ずしもポジティブ感情に影響しないことを示した。この成果は、特性的楽観主義は、ポジティブ感情の変化によって説明できるとする理論は十分ではないことを示している。また本研究は、自己選択や報酬が特異性処理を高めるとは限らないことを示した。自己選択や報酬は常識的には学習を促進する変数であるが、本研究は状況によってはむしろ誤りを増やす可能性を示唆する。

研究成果の概要(英文)：Optimism is a belief that the future holds good outcomes. While some studies suggested that high level of dispositional optimism facilitates information processing such as coping strategy, encoding processing in dispositional optimism has been remained unknown. (1) The present results showed that amount of false memory in distinctive learning condition was less than that in control condition, suggesting that distinctive features in study materials enhanced encoding processing especially in participants in high level of dispositional optimism. (2) Reward and self-choice did not suppress memory errors, indicating that these variables did not facilitate encoding processing. (3) Writing future goal enhanced dispositional optimism, although writing future goal did not influence positive affect. This result indicated that level of dispositional optimism cannot be explained by previous account that positive affect modulates level of dispositional optimism.

研究分野：認知心理学

キーワード：楽観主義 特性的楽観主義 虚偽記憶 符号化 自己選択効果 示差性

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

特性的楽観主義とは自分に良い結果が起きると期待する傾向である。特性的楽観主義は、社会適応を促すと考えられており、自己調整モデルにおいて理論化されている(Scheier & Carver, 1985)。すなわち、特性的楽観主義の高い人は目標達成のために有意義な情報を獲得して吟味し、達成に向けて行動を調整すると説明される。しかし、特性的楽観主義の認知過程を検討した実験的研究は少なく、特に符号化処理を検討した研究はわずかである。特性的楽観主義においては、記憶の誤りが少ないことが示されており(鍋田, 2015)、特に学習項目の詳細な情報を符号化する特異性処理が促進されることが示唆される。

2. 研究の目的

(1)文章による示差性の付与が符号化処理に与える影響

本研究は、虚偽記憶手続きを用いて学習材料への示差性の付与によって符号化における特異性処理が促進されるかを検討した。虚偽記憶とは、特定の単語(ルアー語、例:痛い)に関連した単語リスト(例:傷、手術など)を学習すると、その後の記憶テストで呈示されていないルアー語を再生したり再認したりする現象である。虚偽記憶は、リスト語の示差的特徴を符号化することによって抑制されることが知られている。Thomas and Sommers(2005)は単語を文章と一緒に呈示して学習させると、単語のみを学習させるよりも虚偽再認が減少することを示し、文章が単語と一緒に示差的特徴として符号化され虚偽記憶が抑制されたことを示した。特性的楽観主義が特異性処理を促進するのであれば、特性的楽観主義の高い個人に特に文章の呈示による虚偽記憶の減少が認められると予測される。

(2)報酬への動機づけが自己選択効果における誤答に及ぼす影響

自己選択効果とは、複数の項目から学習者自身が選択して学習した項目(自己選択項目)は、実験者が予め選択し、参加者が学習した項目(強制選択項目)に比べて再生成績や再認成績が良いことである。自己選択効果は、自己選択による動機づけの高まりがある。すなわち、選択することによって学習の動機づけが高まり特異性処理がなされ記憶成績が高まると説明される()。本研究では特異性処理を高める変数として学習の自己選択と報酬の効果を検討した。

(3)特性的楽観主義に与える将来の目標の記述の効果

本研究は特性的楽観主義が自己制御によって変化するかを検討した。自己制御に影響するとされている将来の目標である可能自己を記述する筆記開示のひとつである Best Possible Self (BPS)法を実施し、その前後で特性的楽観主義が変化するかを調べた。同時に、BPS法が特性的楽観主義に選択的に影響するのかどうかを検討するため、ストレス反応(尾関・原口・津田, 1994)、気分(川人・大塚・甲斐田・中田, 2011; Watson et al., 1988)、ソーシャルサポート認知(嶋, 1992)を測定し介入による影響を調べた。

3. 研究の方法

(1)文章による示差性の付与が符号化処理に与える影響

参加者 98名の大学生が参加した。参加者は実験参加前に、外山(2013)の日本版楽観・悲観性尺度(J-OPS)から楽観性を調べる10項目及び、多面的感情状態尺度(PANAS)(佐藤・安田, 2001)に回答した。

要因計画 学習材料(文章、単語)を要因とする要因参加者内計画であった。

刺激材料 鍋田(2015)からルアー語の関連語8語から成るリスト12個を用意した。それぞれのリストは、ルアー語との関連性が強い単語から呈示された。12個のリストのうち、6個を無作為に学習材料の条件のいずれかに割り当てた。再認テストでは、各リストのルアー語に加えて、各リストの3番目と8番目に呈示されたふたつの単語を呈示した。再認テストのディストラクタには3つの単語の組を12組作成して使用した。それぞれの組は中心となる単語(統制ルアー語)ひとつと、それに関連する単語(統制学習語)ふたつから構成された。

手続き 実験は集団で行われた。参加者全員が着席した後に、参加同意書と楽観主義と気分についての質問紙が配付され、これらに回答した。その後、学習を行った。ここでは部屋の前のスクリーンにひとつずつ表示される文章を読み上げ、文章内の大きく呈示された単語を学習した

(Figure 1)。6リストの文章学習終了後に約1分間の遅延課題を行ってから単語学習を行った。ここでは参加者は単語を読み上げ、その単語を記憶した。6リストの学習が終了したら、約5分間の遅延課題を行った。その後、テスト項目が印刷された紙が配布され、再認テストを行った。学習材料の呈示条件の順序は半数ずつ入れ替えた。

(2)報酬への動機づけが自己選択効果における誤答に及ぼす影響

参加者 16名の大学生が参加した。

要因計画 選択型(自己選択、強制選択)と得点(高得点、低得点)を要因とする、2要因参加者内計画であった。

学習リスト 特定の言葉(例:痛い)の連想語12個(例:注射・手術・お腹...)からなるリストを宮地・山(2002)から8つ選び、その8つを組み合わせで計4つのペアリストを作成した。各ペアリストは12対の単語から構成された。これらのペアリストの内、半数ずつを選択型の各水準に割り当てた。自己選択条件ではペアのふたつの単語ははがきサイズのカード1枚に印刷さ



Figure 1 文章学習条件

れた。強制選択条件でも同様にペアの単語を印刷し、片方のリストの単語に下線を引いた(Figure 2)。

動機づけの操作 再生できれば高い点(3点)を得られる学習項目を含むペアからなる高得点のペアリストと、低い点(1点)の学習項目を含むペアからなる低得点のペアリストとがあった。4つのペアリストのうち、半数ずつをそれぞれ高得点と低得点に割り当てた。

手続き 参加者にペアの単語が印刷されたカードの束(カードは13枚×4ペアリストの52枚)と鉛筆を配布した。カードの束は裏返しに置かれていた。参加者は実験に関する教示の後に、カードの束をひっくり返し、実験を開始した。自由選択条件では、参加者はまず一番上のカードを取って脇に置き、2枚目のカードから学習を開始した。一番上のカードには単語がひとつ書かれており(例:電波)、2枚目以降の

カードには単語のペアが書かれていた。参加者はペアの単語のうち1枚目のカードに書かれた単語に関連のある方を自分で選んで下線を引き、学習した。実験は1枚のカードにつき10秒のペースで進めた。強制選択条件では、2枚目以降のカードに書かれた単語のペアのうち、あらかじめひとつの単語に下線が引かれており、参加者はペアのうち下線の引かれた単語を覚

えた。それぞれのペアリストの学習の開始前に参加者には得点に関してのアナウンスがされた。実験では、選択型のいずれかの水準の2つのペアリストが連続して呈示され、2つのペアリストの呈示が終わったら再生テストを行った。ここでは、参加者は、呈示された2つのペアリストの学習項目を思い出せるだけ思い出す自由再生テストを3分間行った。

(3)特性的楽観主義に与える将来の目標の記述の効果

参加者 大学生12名であった。

質問紙 特性的楽観主義・悲観主義質問紙(外山,2013)のうち、特性的楽観主義を測定する10項目、ストレス自己評価尺度(尾関・原口・津田,1994)のうち、ストレス反応の下位項目として抑うつ尺度5項目、不安尺度5項目、怒り尺度5項目、認知的混乱5項目、引きこもり5項目、身体的疲労5項目、自律神経系の活動性亢進5項目の合計35項目を用いた。日本語版 The Positive and Negative Affect Schedule (PANAS)(川人・大塚・甲斐田・中田,2011; Watson et al., 1988)のうち、ポジティブ感情10項目、ネガティブ感情10項目を用いた。ソーシャルサポート認知(嶋,1992)を用いた。

手続き 実験参加者は12名全員がひとつの部屋に集まり、実験者から説明を受けた。その後、参加者には4つの冊子A4サイズの紙が入る角2サイズの封筒が1枚配布された。冊子は、A4用紙1枚と、気分評定の質問項目が記載された質問紙が1枚から構成され、この順番で上から重ねて左上をホチキス留めされた。A4用紙には右上に番号が記載され、冊子ごとに1から4までの数字のいずれかが記載された。番号が書いてある以外はA4の用紙は白紙であった。参加者はこれらの配布物を確認したのちに、それぞれ配布された特性的楽観主義尺度とストレス反応、ソーシャルサポート認知尺度に回答した(T1)。これらの尺度に回答した後に、参加者には封筒とA4サイズの紙が配付された。その後、標準的なBPS法の教示がなされた。ここでは、King, (2001)の教示を日本語に翻訳し、次のように行った“あなたの将来の人生について考えてください。すべてのことがうまくいった場合にどうなるのかをできるだけ想像してください。あなたは懸命に努力し、目指すすべての目標をうまく達成することができました。このことがすべての目標について現実になったと考えてください。それでは、あなたが想像したことを書いてください。”参加者はこの教示を聞いたあとに、手許のA4用紙に20分間可能自己を想像し、記述した。開始から20分間が経過したら合図をし、終了した。その後、ポジティブ感情とネガティブ感情の質問紙に回答した。実験は4日間継続した。4日間の実験が終了したら、記述した用紙と感情の質問紙を封筒に入れて封をし、実験者に手渡して返却した。続けて、再度特性的楽観性とストレス反応、ソーシャルサポート認知の質問紙に回答した(T2)。最後に、1週間後に特性的楽観性とストレス反応、ソーシャルサポート認知の質問紙に回答した(T3)。

4. 研究成果

(1)文章による示差性の付与が符号化処理に与える影響

参加者ごとにルアー語の平均虚再認率を求め、条件ごとに平均した。対応のあるt検定の結果、文章条件は単語条件よりも虚再認率が高かった($t(97) = 2.35, p < .05$)。また、学習材料の効果を検討するため、参加者ごとに文章条件の虚再認率と単語条件の虚再認率の差を求めた。参加者の特性的楽観主義の得点を目的変数とし文章と単語の虚再認率の差を説明変数として回帰分析を行った。その結果、特性的楽観主義の得点は、文章と単語の虚再認率の差の予測は有意傾向であった($R^2 = .32, b = -0.009, SE = 0.005, t(96) = 1.79, p = .07$)。文章と単語の虚再認率については、文

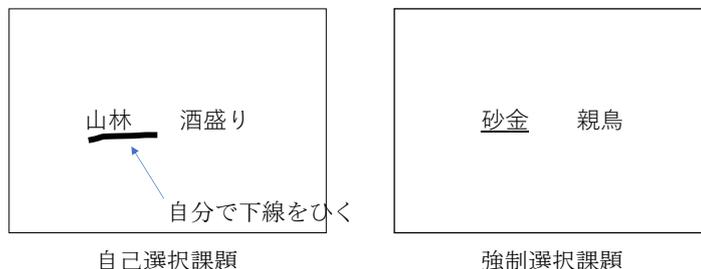


Figure 2 自己選択課題と強制選択課題の例

章による学習は単語による学習よりも虚再認が減少する結果は認められなかった。むしろ、先行研究の学習材料の影響とは異なり、文章による学習は単語よりも虚再認を増加させた。その一方で、特性的楽観主義との関わりにおいては予測通りの方向の結果が示唆された。すなわち、有意差は認められなかったものの、特性的楽観主義の傾向が高い参加者ほど、文章の虚再認が単語の虚再認よりも少ない傾向があった。

(2)報酬への動機づけが自己選択効果における誤答に及ぼす影響

学習項目の正再生数と、学習項目以外の項目を再生したものを誤再生数として求め、条件ごとに平均値を算出した (Table 1)。正再生数の平均値に 2 要因分散分析を行った結果、選択型の主効果 ($F(1,15) = 0.06, n.s.$)、得点の主効果 ($F(1,15) = 0.79, n.s.$)、及び交互作用 ($F(1,15) = 0.01, n.s.$)は有意でなかった。誤再生数については、選択型の主効果 ($F(1,15) = 4.89, p < 0.5$)と、得点の主効果 ($F(1,15) = 6.61, p < 0.5$)が有意であった。交互作用は有意でなかった ($F(1,15) = 0.84, n.s.$)。学習項目の再生成績において自己選択条件で強制選択条件よりも成績が良い効果は認められず、自己選択効果は認められなかった。学習項目以外の再生においては自己選択条件の方が強制選択条件よりも多かった。すなわち、誤再生においては自己選択で強制選択よりも誤再生が多い効果が認められた。

自己選択効果が認められなかったのは、10 秒という制限時間が短く時間内の自己選択が困難であったためかもしれない。誤再生は自己選択で強制選択よりも多く、自己選択が難しかったことと一致している。自己選択条件においては、参加者は自己選択と符号化のふたつを実施したと考えられ、自己選択の負荷が大きいため符号化を十分にすることができず、学習の促進が見られなかったのかもしれない。

(3)特性的楽観主義に与える将来の目標の記述の効果

T1 から T3 のうち回答しなかった尺度があった 3 名及び、実験の 1 日目から 4 日目のうち感情の質問紙の提出がなかった 1 名以外の、8 名のデータについて、尺度ごとの基本統計量を Table 2 に示す。また、BPS 法の影響を検討するため、感情の質

Table2 尺度ごとの基本統計量

	平均値	標準偏差	最小値	最大値
特性的楽観主義	3.12	0.73	1.80	3.90
ストレス反応	1.85	0.35	1.43	2.44
ソーシャルサポート	3.58	0.75	2.47	4.97
ポジティブ気分	2.62	0.75	1.47	3.61
ネガティブ気分	1.67	0.61	1.13	2.98

問紙が提出されなかった 1 名を加えた 9 名を対象に、参加者ごとに T1 から T3 のそれぞれについて、特性的楽観主義、ストレス反応、ソーシャルサポート認知の尺度ごとに平均を求めた。尺度ごとの結果を Figure 4 に示す。これらのデータについて測定時点を要因とする分散分析を行った。その結果、特性的楽観主義においては、有意傾向であった ($F(2, 16) = 3.62, p = .06$)。T1 よりも T2 の方が特性的楽観主義の得点が高い傾向が見られた ($t = 1.98, p = .08$)。また、T1 よりも T3 の方が特性的楽観主義の得点が高い傾向が見られた ($t = 2.14, p = .06$)。ストレス反応においては有意差が見られた ($F(2, 16) = 12.96, p = .001$)。T1 よりも T2 の方が得点は低かった ($t = 4.32, p$

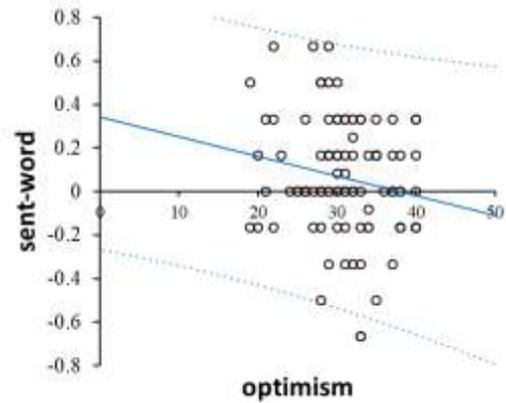


Figure 3 文章と単語の差と特性的楽観主義の関係

Figure 3 文章と単語の差と特性的楽観主義の関係

Table 1 条件ごとの正再生数と誤再生数

	強制選択	自己選択
正再生		
高得点	6.44	6.38
低得点	6.13	5.94
誤再生		
高得点	1.06	1.19
低得点	0.25	0.94

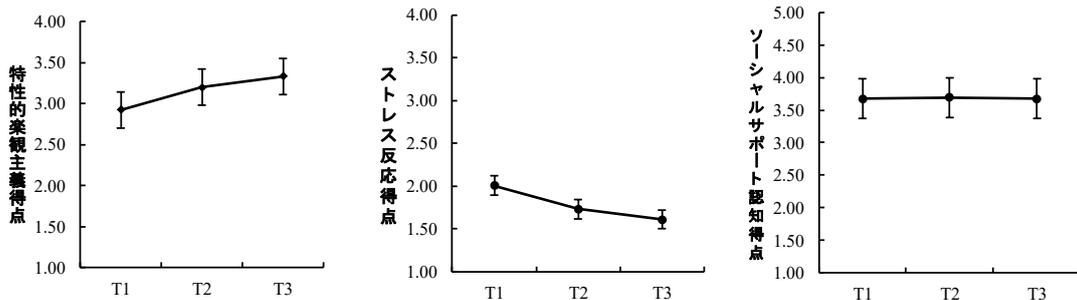


Figure 4 特性的楽観主義(左)、ストレス反応(中央)、ソーシャルサポート認知(右)の尺度得点の測定時点(T1, T2, T3)による変化

=.003)。また、T1 よりも T3 の方が得点は低かった ($t = 4.07, p = .004$)。ソーシャルサポート認知においては、有意な差は見られなかった ($F(2, 16) = 0.01, p = .99$)。また、ポジティブ感情とネガティブ感情については BPS の実施の最初の 1 日目と 4 日目の参加者ごとの平均値を対応のある t 検定で比較した結果、ポジティブ感情とネガティブ感情のいずれにおいても有意な差はみられなかった ($t_s = 0.12, 1.17$, それぞれポジティブ感情とネガティブ感情)。

本研究では、特性的楽観主義が自己調整によって変化するかどうかを検討することを目的として、将来の目標についての記憶である可能自己を記述する筆記開示を実施した。20 分間の記述を 4 日間実施する King (2001) に準拠した手続きで実験を実施した結果、特性的楽観主義について有意傾向ではあるが変化が認められた。加えて、ストレス反応は有意に低下した。また、4 日間実施するごとに測定したポジティブ感情及びネガティブ感情には変化が認められなかった。この結果は、特性的楽観主義の促進とストレス反応の低下は、可能自己を記述したことによる感情の変化では説明できないことを示す。すなわち、本研究は必ずしもポジティブ感情が上昇しなくても特性的楽観主義は促進されうることを示した。

目標を意識することは目標を達成する行動の動機づけを高めることが知られている (e.g., 宮本・中田・堀野, 1994; 鍋田, 2016)。本研究においては、参加者は可能自己を記述する作業が将来的な目標を意識することにつながり、動機づけが高められたと考えられる。本研究では可能自己の記述によって高められた将来的な目標達成の動機づけが、特性的楽観主義を促進したと考えられる。

本研究では筆記開示の効果を検討するために、筆記開示の終了直後 (T2) 及び終了から 1 週間後 (T3) で効果を測定した。その結果、特性的楽観主義の促進は筆記開示終了直後だけでなく、筆記開示終了から 1 週間が経過した時点でも認められた。この結果からも、筆記開示をしていない期間を経過してからも特性的楽観主義の促進が維持されたことは、特性的楽観主義の促進が筆記開示の際に喚起されたポジティブ感情によるものであるという考えに一致しない。

<主な引用文献>

- ①. 鍋田智広 (2020). 特性的楽観主義に与える将来の目標の記述の効果. 九州女子大学学術情報センター研究紀要, 3, 111-116.
- ②. 鍋田智広 (2020). Best Possible Self 法による特性的楽観主義とポジティブ感情の検討, 日本発達心理学会第 31 回大会.
- ③. Nabeta, T. (2019). Optimistic learners more correctly remember sentences than words. 17th Annual Conference of Hawaii International Conference On Education.
- ④. 鍋田智広 (2018). 報酬への動機づけが自己選択効果における誤答に及ぼす影響, 日本発達心理学会第 31 回大会.
- ⑤. 鍋田智広 (2018). 特性的楽観主義が符号化処理に与える影響. 中国四国心理学会第 73 回大会.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 鍋田智広	4. 巻 3
2. 論文標題 特性的楽観主義に与える将来の目標の記述の効果	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 九州女子大学学術情報センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 111-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 大森和美・神垣彬子・中井靖	4. 巻 93
2. 論文標題 特別支援教育コーディネーターにおける役割ストレス -経験の有無及び役割理解との関連から-	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 宮崎大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 65,73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 鍋田智広	4. 巻 55
2. 論文標題 高校での宿題における学習過程が大学での課題の学習に与える影響：動機づけに注目した検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 九州女子大学紀要	6. 最初と最後の頁 95, 110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Yiqun Wang, Nobutaka Gushiken, Michiko Aso	4. 巻 203
2. 論文標題 A Structural Analysis of the Recognition of Japan, the L2 Motivational Self System, and Motivated Learning Behavior	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 JOURNAL OF JAPANESE LANGUAGE STUDY AND RESEARCH	6. 最初と最後の頁 85, 94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 鍋田智広	4. 巻 26
2. 論文標題 非流暢性効果の実験室実験における再現性の検討ー学習材料の非流暢性が符号化方略に及ぼす影響ー	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 東亜大学紀要	6. 最初と最後の頁 55-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大濱知佳・永野駿太・小野史典	4. 巻 16
2. 論文標題 思考抑制に与える代替思考の時間的要因の影響	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本感性工学会論文誌	6. 最初と最後の頁 253-256
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.5057/jjske.TJSKE-D-16-00098	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Sousuke OTSUKA, Fuminori ONO, Takeharu SENO	4. 巻 16
2. 論文標題 Mindfulness Can Modulate Vection Strength	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 International Journal of Affective Engineering	6. 最初と最後の頁 11-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.5057/ijae.IJAE-D-16-00014	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Nakai Y, Takiguchi T, Matsui G, Yamaoka N, Takada S	4. 巻 124
2. 論文標題 Detecting Abnormal Word Utterances in Children With Autism Spectrum Disorders: Machine-Learning-Based Voice Analysis Versus Speech Therapists.	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Perceptual and Motor Skills	6. 最初と最後の頁 961-973
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/0031512517716855	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計23件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 鍋田智広
2. 発表標題 Best Possible Self法による特性的楽観主義とポジティブ感情の検討
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鍋田智広
2. 発表標題 学習を権威づける教示はテスト効果を促進するか？
3. 学会等名 日本認知心理学会第17回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中井靖
2. 発表標題 発達検査を用いた実態把握に基づく教育実践の効果-特別支援学校教員の教師効力感の変容-
3. 学会等名 日本特殊教育学会第57回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鍋田智広
2. 発表標題 報酬への動機づけが自己選択効果における誤答に及ぼす影響
3. 学会等名 日本認知心理学会第16回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nabeta Tomohiro
2. 発表標題 Optimistic learners more correctly remember sentences than words
3. 学会等名 17th Annual Conference of Hawaii International Conference On Education (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 矢野慶次郎・村上恵介・藤山ちなみ・齊藤光子・山村友梨紗・岩崎博子・小野史典
2. 発表標題 同性愛者に対するバイアスがパーソナリティの印象に与える影響
3. 学会等名 九州心理学会第79回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 濱咲里紗・沖林洋平・小野修一・小野史典
2. 発表標題 人数変動が説得する意思に及ぼす影響
3. 学会等名 九州心理学会第79回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山内裕斗・小野史典
2. 発表標題 視線に関する不快感情尺度の作成
3. 学会等名 九州心理学会第79回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 五十嵐千尋・大歳太郎・片山裕代・中井靖・大歳美和
2. 発表標題 自閉スペクトラム症児における感覚刺激に対する年齢別反応特性 - 第2報 -
3. 学会等名 第52回日本作業療法学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大歳太郎・五十嵐千尋・倉澤茂樹・中井靖・大歳美和
2. 発表標題 学齢期の自閉スペクトラム症児における感覚刺激に対する年齢別反応特性
3. 学会等名 第52回日本作業療法学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松井学洋・中井靖・高田哲
2. 発表標題 微細運動と言語能力の発達からみた模倣動作「バイバイ」
3. 学会等名 第121回日本小児科学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鍋田智広
2. 発表標題 文字の読みづらさは記憶成績を高めるのか？－文字の非流暢性が成績の予測に与える影響の検討－
3. 学会等名 日本心理学会第81回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 鍋田智広
2. 発表標題 特性的楽観主義が符号化处理に与える影響
3. 学会等名 中国四国心理学会第73回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山下健一・小野史典
2. 発表標題 性格特徴の言語化が自己肯定感に与える影響
3. 学会等名 日本心理学会第81回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 具志堅伸隆
2. 発表標題 対人完全主義尺度作成の試み
3. 学会等名 日本グループダイナミクス学会第64回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 鍋田智広
2. 発表標題 母親への自己呈示の目標が大学生の学業に関する課題の遂行に及ぼす影響
3. 学会等名 日本発達心理学会第28回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山根倫也・永野駿太・片桐咲恵・小野史典
2. 発表標題 言語符号化効果とフォーカシング的態度との関連
3. 学会等名 九州心理学会第77回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 川端理子・小野史典
2. 発表標題 公正世界信念の脅威が被害者非難に与える影響
3. 学会等名 九州心理学会第77回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 山下健一・小野史典
2. 発表標題 挫折経験による社会的知恵の獲得
3. 学会等名 九州心理学会第77回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 木原祥平・小野史典
2. 発表標題 意思決定と気分状態の関係について
3. 学会等名 九州心理学会第77回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 永野駿太・小杉考司・小野史典
2. 発表標題 楽しい考えは笑顔から - 思考抑制に与える表情操作の影響 -
3. 学会等名 中国四国心理学会第72回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Noriko Yamaoka, Yasushi Nakai, Satoshi Takada
2. 発表標題 Behavioral development related to joint attention in low-risk very and extremely low birth weight infants at around 19 months of age
3. 学会等名 The 48th Asia-Pacific Academic Consortium for Public Health Conference (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 具志堅伸隆
2. 発表標題 他者との関係性における完全主義傾向に関する研究
3. 学会等名 中国四国心理学会第72回大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小野 史典 (ONO Fuminori) (90549510)	山口大学・教育学部・准教授 (15501)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	中井 靖 (NAKAI Yasushi) (80462050)	宮崎大学・教育学部・准教授 (17601)	
研究 分 担 者	具志堅 伸隆 (GUSHIKEN Nobutaka) (10449910)	東亜大学・人間科学部・教授 (35503)	